

第3節 ホイアン出土遺物の整理と保管

阿部 百里子・菊池 誠一・熊崎 保

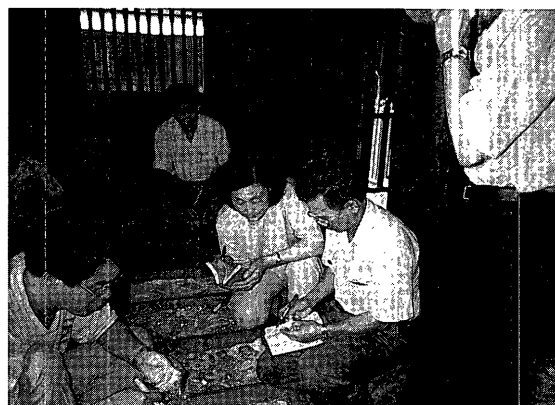
はじめに

1993年の発掘調査以来、ホイアンの遺跡から出土した遺物の整理作業は、そのほとんどを現地ホイアンにおいて日本人・ベトナム人合同でおこなってきた。それは、外国人であるわたしたちが発掘調査をする場合、出土品の整理を現地においてベトナム人と合同でおこなうこと、また遺物の現地保管が大切であると考えたからである。それは、出土品を前に日本人研究者とベトナム人研究者の意見交換ができ、遺物への理解が深まること、また現地保管・公開をすることによって調査成果の市民への還元が可能になることであった。当時、ホイアン市はクアンナム・ダナン省に所属し、出土品の保管は原則として省博物館でおこなわれていた。しかし、ホイアン市から30kmも離れ、展示スペースや収蔵庫の限られた省博物館よりも、ホイアン市の伝統的町屋の中で遺物を保管・公開すれば、町並み保存をすすめる市にとって、有効に活用できると考え、各関係機関のご協力をいただき、実行にうつした。

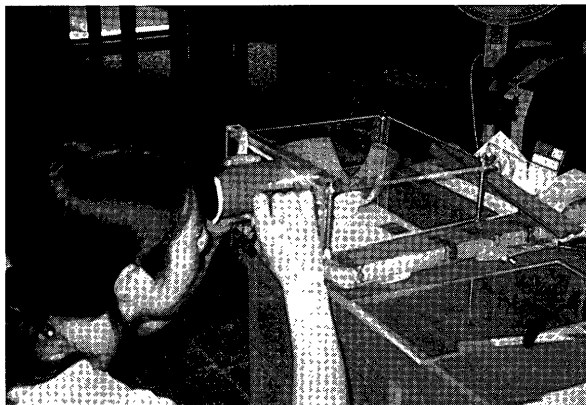
そのため、わたしたち日本隊は数次にわたりベトナムに赴き、ホイアンに長期間滞在して遺物の実測をつづけてきた。出土遺物の大半は、複雑な文様を持つ青花などの陶磁器である。陶磁器のうち遺構にともなうものは、別個体であれば原則として小破片といえど実測し、遺構外のものとは生産地別・時期別にその代表的な遺物を実測する方針をとった。これは、ベトナムにおいては発掘調査報告書の中に、遺物の実測図など基本的な資料提示がほとんどなされていないため、今後の調査研究のためにも多くの資料提示が必要であったからである。また、調査日数や調査資金を理由にして、わずかな資料を提示するだけでは外国人による海外調査の根本姿勢が問われると考えるからである。しかし、陶磁器の量が多い。そ



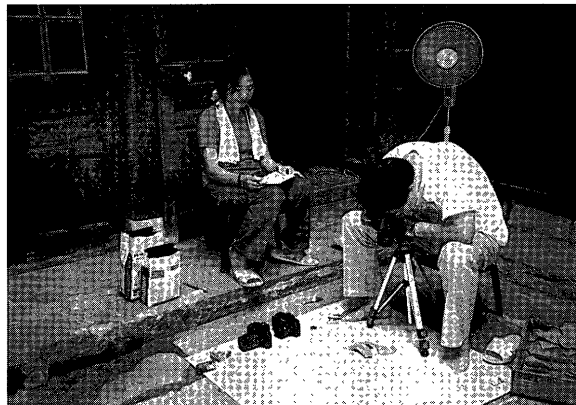
遺物観察



ベトナム人、中国人、日本人による遺物観察



実測の様子



写真撮影

のため、作業をより迅速に、かつ精度を落とすことなくすすめるために、様々な工夫をおこなった。この章では海外調査における整理作業の一例を紹介しよう。

2 実測までの作業

発掘調査と併行して遺物の洗浄、注記・接合作業をホイアン市遺跡保存管理センターの女性職員が中心となっておこなった。注記作業では、ベトナム人は筆を扱った経験が少ないため、土器片に筆で小さな文字を記入するのは大変だったようである。陶磁器片には油性マジックで注記をおこなったため、こちらの方はスムーズにすすんだ。また、接合作業ではすでにサーフィン文化の土器片などの接合経験があり、問題がなかった（写真図版24）。

遺物の分類にあたっては、磁器を大橋康二氏、陶器を菊池が中心となってすすめ、ホイアン市貿易陶磁博物館の二階で作業をおこなった（写真図版24）。

3 実測

遺物実測はホイアン市遺跡保存管理センター、およびホイアン市貿易陶磁博物館の一室を借りて、日本人研究者が中心となっておこなった。遺物の半数が複雑な文様を持つ磁器類であり、整理作業の精度を落とすことなく迅速にすすめるため一般に実測器とよばれる器材を製作し、文様を描くのに使用した。

今回使用したタイプの実測器の製作・使用法の紹介として書かれた論文には、鈴木俊成、高橋保雄両氏による「石器の実測方法」（『考古学ジャーナル』360号、1993年）がある。詳しくはその文献を参照していただきたい。

わたしたちが使用した実測器は、山本暉久氏が早稲田大学考古学実習等で使用した実物を参考にして熊崎が製作した。また、1994年8月にベトナムで最初に使用した際は、山本氏製作のものをご厚意により貸与いただき、併せて使用した。この装置は遺物を固定するための固定器と、真上からの測点を決定できる実測管からなる。固定器は2枚の亚克力板を上下に組み立てたもので、上板の上にはOHPフィルムを貼っておく。固定器の中に遺物を固定し、実測管で覗きOHPフィルムに文様をなぞる。これを実測図の裏に貼り後ろから光を当て実測図に文様を写し取るというものである。さらに正確な文様を描くため陶磁器を肉眼で観察しながらディバイダー等を用いて文様部を加筆・修正した。なお、実測器は使用

の過程において陶磁器の実測に合わせて改良し、簡略化した。

熊崎が製作した実測器が従来のものと異なる点は、まず固定器については、アクリル板の厚みが鈴木、高橋両氏および山本氏のもの3 mmであったのを5 mmにした。またボルトナットは鈴木、高橋両氏のもの径5 mmですべて普通のナットであったのを山本氏のものにならって径6 mmとし、上板を調節するナットを蝶ネジとした。使用法に関しては、鈴木、高橋両氏のものOHPフィルムに書き取った線を方眼紙に写すのに重ねてコピーをとっているが、わたしたちは山本氏の方法をとって裏から光を当てて方眼紙に直接書き取った。

4 トレース

トレースは実測者および昭和女子大学学部生が中心になって、主に昭和女子大学でおこなった。原図をコピー機で67%に縮尺し、これをトレースした。磁器に

地点名	DCP II 溝跡	図版No.	092	実測No.	k138	入力No.	300
産地	福建・漳州	生産年代	1590~1640年代	器種	皿		
接合No.	395	a	16.0	b	3.2	c	7.8
外側文様		見込文様	花鳥文	内側文様	青海波文・窓内花文		
高台内	無釉	付着物	畳付きの一部に砂粒	胎土	精緻		
釉調	明オリブ灰(2.5GY7/1) 呉須薄く、暗く発色			焼成	良好	化粧掛け	<input checked="" type="checkbox"/>
残存	4/5	備考	折縁皿				




図1

品名: 折縁皿 (漳州窯系) (1590~1640年代)

出土: 溝跡

調査: 昭和48年 (1973.11)

説明: 明オリブ灰(2.5GY7/1) 呉須薄く、暗く発色。自然釉の裏面に施す。裏面に砂粒を施す。

形状: 皿

径: 16.0cm

口径: 16.0cm

高さ: 3.2cm

底径: 7.8cm

注記: 1973.11 花鳥文 (口内) 窓内と地に青海波


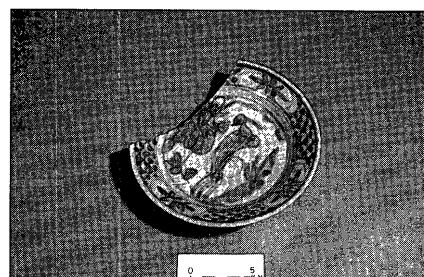


図2



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

図98 遺物台帳の一例

関しては文様をトレースするのに硬質色鉛筆とパソコン（マッキントッシュ）を併用した。これはスキャナーを用いて原図を67%に縮小して取り込み、方眼線、外形線、注記など文様の部分以外はすべて消し、文様のみをトレーシングペーパーに印刷したあと、黒色の硬質色鉛筆で文様部を補色する方法である。これにロットリングペンで外形線などを書き込み仕上げる。なお、パソコンを使うことによる縮尺などの誤差については、コピー機で67%に縮尺したものと比べてみたが全く問題なかった。複雑な文様を持つ磁器のトレースは実測と同様多くの時間と手間を要する。この方法を用いると完形の碗で約20分程でトレースでき、呉須の濃淡や細かい部分の文様まで正確に表現することができる。

5 おわりに

以上が本調査における整理作業の様子である。昭和女子大学のベトナムにおける考古学調査で発掘された遺物は、すべてホイアン市貿易陶磁博物館収蔵庫に保管しており、一部は博物館前屋二階の展示室で公開している。収蔵庫内では現地ホイアンの家具屋に特注した木箱（付篇第4節の図101参照）を用いて、遺跡・生産地別に分けて収納している。また、各遺物の詳細な情報については写真や実測図を添付した個別の遺物台帳（図98）を作成しており、ホイアンと昭和女子大学で1部ずつ保管している。また図面や写真類、報告書に使用したトレース図などは昭和女子大学考古学研究室において管理している。トレース図に関してはフロッピーディスクに入力された状態で保管している。今後、ベトナム・日本の考古学研究者各位のさらなる研究の発展のために、これらの資料を活用されることを切望する。

